

小説・その後の菊とギロチン

瀬々敬久

夜が白々と明け始めた。周囲に気づかないカーテンを少し開ける。水田にはやっと伸び始めた稲の穂が見え、その向こうには低く並んだ山々が白く霞んであった。生まれ育った東北の田舎町でもよく目にする光景だ。太陽が出るまで三十分もかかるだろうか。再びカーテンを閉めて車内を見回した。乗客のほとんどもは寝ていて、新宿で乗り込む時にきづいたが、皆、自分の孫のような年だった。敏江は今年で八十四歳になる。東京から大阪まで行く深夜バスの乗客の中では一番高齢。生まれたのは東北の三陸海岸から内側に入った山の麓、周囲は畑と山しか見えなかった。同年代には珍しく兄弟も姉妹もない。自分たちの世代は中途半端だとずっと思ってきた。もの心ついた時は戦争の匂い。教えられたのは忠君愛国の精神。やがてアメリカと戦争を始めて終戦が小学校の六年生。学校の教えは百八十度変わった。新しく取り入れられたのは、自由と平等、よく分からなかったが民主主義というものらしかった。偉いはずの先生だって、考え方を変えるんだ。何だか世の中には信じられるもんなんかねえな。そういうことを家で言ったら、オトウは何にも言わなかったけど、オツカアは「でも信じねばダメだぞ。信じねばダメだ」泣きそうな顔して言ったのを覚えてる。その顔は何か恐ろしくもあり、吾に言ってるのでなくオツカア自身に言い聞かせるようにも聞こえた。それからの敏江は地元の高校を出て、戦後出来たばかりの農協に就職した。

やがて高速バスから見える景色に住宅街とビルまで増えてくる。都会が近づいてきたのが分かった。敏江が最初に東京に出たのは二十三歳の時だ。オトウは根っからの百姓で、その頃はリンゴ作

りに精出していた。オトウの知り合いに三十歳過ぎて真面目ばかりに百姓に気傾けすぎて、未だ結婚出来ぬ男がいるから紹介するって言われて会わされ、はっきり意思を伝えなかったのが悪かったのか、いつの間にか本人の知らない所で結婚話が進んでしまった。敏江はする気はねえとオトウに言うが、頑固一徹で生きて来た明治生まれには敏江の思いなど伝わらない。ここは家出だと、それまで貯金した金を掻き集める。金の卵と話題になった集団就職列車が東北から上野に走り始めたのが、前年の一九五四年だった。東京行けば何とかなる。そう思って準備を始めたが隠していた靴がオトウに見つかってしまった。家の納屋に鍵かけられ閉じ込められた。何が民主主義だ、全然不自由じゃないかと敏江は思うが後の祭り、だが、その夜、オツカアが鍵開けてくれた。オトウに取られた靴も金も返してくれた。「行ってこい、敏江」オツカアはそれだけ言った。敏江は夜道を走った。駅まで二十キロ、五時間かかったが朝方には駅に着く。始発に乗って、ようやくと東京へ。まずは人の多さに驚いたが、回りに回って大田区の蒲田というところにあった町工場に転がり込む。不良品のチェックが主な仕事。寮完備という求人広告に飛びついたが、酷かった。朝から晩までネジと睨めっこ。寮と言ったって田舎の厩並み。すぐ辞めて、山手線に乗って、またぐるぐる回った。人と建物の多さ、東京はすごいなあと思う。たまたま拾った求人紙で南千住にある食堂の募集を見つけて行った。汚い町だと一瞬にして思う。日雇いと呼ばれる労働者の町が近くにあるらしい。やめようと思ったが、ここの若主人が気持ちのいい青年だった。それが理由で敏江はここで働くようになる。

バスは高速道路を降りた。まだ夜明け前の光のせいか白々として全部が灰色に見えた。聞けば終

点だと言われ、ビルの谷間のようなところで降ろされた。駅に行くにはどつちに行けばいいのだろう。降りた乗客たちのほとんどが同じ方向に向かって歩き出したので、そつちだろうと思ひ歩き出す。大阪と言えどもつと泥臭い町のイメージがあったのが随分綺麗で清潔なのに敏江は驚く。

敏江が南千住にあった食堂、喜納屋の息子、喜納隆志と結婚したのは一九六〇年の九月だった。惚れた理由、ここで働き始めたのも直感なら結婚まで行ったのも直感だった。だが敢えて言うなら隆志の気取らない処と一緒にいたら気が落ち着くところだ。都会育ちのくせして敏江と同じ田舎の匂いがした。形式ばかりだったが、背後に大きなガスタンクが三つ並ぶ隅田川沿いの石浜神社で結婚式を行った。郷里からオトウとオツカアにも来てもらう。結婚することが決まったこの年の正月、隆志と生まれ故郷へ挨拶には行っていた。五年ぶりの故郷、オトウは言葉も荒げることもなく吾を受け入れてくれた。荒くれの客たちを扱ひなれた隆志は性格も温厚で人間も出来ていた。東京の男が娘を奪う、最初はそういう印象だった両親もあっさりと言志を受け入れた。それもあって結婚は無事に終わる筈だったが意外な顛末があった。オツカアが東京でいなくなつた。

両親が東京に着いたのが九月十一日、まずは喜納屋に挨拶に来る。隆志の両親ともうまくいった。だがこの時からオツカアの様子は変だつた。変にソワソワして落ち着かない。夕食を浅草のすき焼き屋と一緒に食べようということになつたが、それまで時間があるので散歩に出たいとオツカアが言う。ついて行こうかというが断られる。やれアンボだアイゼンハワーだと盛り上がっていた政治運動も七月の内閣退陣から急激に退潮していたが、この町だけは違っていた。八月一日には山谷騷動と呼ばれる事件が近くのマンモス交番で起こつた。江戸時代から寄せ場として日雇い労働者の多いこの町ではそれまでも小競り合ひは多くあつたが、その夜はドヤの手配師と宿泊者のケンカに對

する警官の処置の仕方が良くないと四百人の日雇い労働者が交番を襲ひ多くの検査者と負傷者が出た。八月三日から八日にはヨッパライを乱暴に扱つたということと延べ六千人がマンモス交番を襲つた。喜納屋はドヤの住人達も多く来る食堂だったので日雇い労働者側に立っていたが、流石に地理もよく分からない女の一人歩きはよくないだろうと義父と一緒に行こうと言うがオツカアは固く譲らない。小一時間の散歩だろうと思つていたのが、戻ってきたのが夜の八時過ぎ。今からじゃ浅草行きも面倒なので、寿司屋の出前を取つた。オツカアにどこに行つてたのだと訊いても、誤魔化すばかりではつきりしない。

その夜は上野の旅館に泊まつてもらつた。翌朝、オトウが起きた時、既にオツカアはいなかつたらしい。「すぐに戻ります」それだけ置手紙してオツカアは消えていた。オツカアが戻つてきたのは朝の十時。外面は良いのだが内弁慶で性根は気の弱いオトウは旅館の朝食も喉に通らず、オツカアを待つていたという。オトウがどこに行つてたと聞いてもオツカアは答えない。結婚式は十一時からだったので二人は慌ててタクシーに乗つた。大震災の復興事業で作られた昭和通りをひた走り石浜神社までやって来た。式は滞りなく終わつて、身内の披露宴を近くの割烹旅館の座敷でやることになった。隆志側の親戚や大学時代の友人、そして義父の知り合ひの何人か。その中にドヤの労働運動家でこれからセンターを作ろうとしている男がいた。劣悪な手配師が労働者に仕事を仲介し中間搾取するような時代だった。センターが労働幹旋の役割を直接担い搾取をこの町から失くす、そんな目標が掲げられていた。有ろう事かオツカアがその男に頭を下げた。男がオツカアに近づき親し気に話している。オトウはどうした、オトウは。元来酒に弱く親戚筋の酌ですつかり酩酊気味のオトウ、既にぶつ倒れそうだ。だけど何でどうして、オツカアが山谷の労働運動家と知り合ひ

